

マンガにおけるロボットのステレオタイプ

——手塚治虫のロボット・キャラクターを中心に——

名古屋大学大学院 孫旻喬

1. 目的

日本のマンガにおいて、人間と疑似する姿を有し、自律性と知能を有する人造物、つまり「ロボット」は多く登場している。これらのロボットの中で、優しくて大人しくて、人間にとって危険性を持たないロボット、「優しいロボット」が多く見られ、一種のステレオタイプとなっている。「優しいロボット」の誕生には、手塚治虫の作品の影響を無視することができない。『アトム大使』（1951）と『鉄腕アトム』（1952）に登場するロボット・キャラクターの「アトム」は日本のストーリーマンガの代表的なキャラクターであり、そのロボット・キャラクターは多くの後進マンガ家に影響を与え、その影響力はマンガ創作やSFフィクションの創作者だけでなく、実際にロボットを作っている人々にまで及んでいると考えられる。

手塚のロボットは魅力的である。ところが、『メトロポリス』（1924）や『ターミネーター』（1984）のような欧米のロボット、そして戦前・戦時中の日本のロボット作品と比較すると、手塚が描く「優しいロボット」はむしろ異質的な存在であると言える。「ロボット」というのはもともと「人間」の外部に立っており、危険で不気味な存在として表現されることが多い。なぜマンガというコンテンツにおいて、アトムのような「優しいロボット」が多く産出されてきたのだろうか？ 本発表は手塚の創作を一つの立脚点とし、マンガにおけるロボットのステレオタイプの形成と変容を考える。

2. 方法

手塚が日本のマンガ史における地位について、竹内オサムは手塚が「戦前戦中の大衆文化、少年小説のエッセンスを、戦後のマンガ文化にそっくり接ぎ木した」（竹内 2008:263）と指摘すると同時に「ただ注意したいのは、そうした既成の文化に影響されつつ、その思想性に手塚は、戦前戦中のそれと格段の開きを見せていた点である」（同上）と主張している。手塚のロボット作品には戦前・戦時中の一連のロボットフィクションとの「連続性」と「変容」の両方が見られる。本稿は手塚以前の諸作品に登場するロボット像を整理し、手塚のロボットと従来のロボットとの連続性及び変容を分析し、その変容がどのような文化的・社会的文脈で起きたのかを考える。

3. 結果・結論

「優しいロボット」というイメージは「日本古来のアニミズム的死生観」（ロバートソン 2013:279）という生命観に基づいて形成したのだと考えられる一方、手塚の作品において、「ロボット」は「異民族」のメタファーとして描かれ、「優しいロボット」は、日本が帝国主義で提唱した「異種族共栄」の理想の「遺産」であると言える。

参考文献

竹内オサム, 2008, 『手塚治虫 ——アーチストになるな——』 ミネルヴァ書房

Robertson, Jennifer, 長野麻紀子訳, 2013, 「ロボットのジェンダー——日本におけるポストヒューマンの伝統主義」 サビーネ・フリューストウックアン・ウォルソール編『日本人の「男らしさ」——サムライからオタクまで「男性性」の変遷を追う』 明石書店